

『今月の天候と農作業』

通巻第5582号
8月号
平成27年 7月 30日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【予報のポイント】

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

太平洋高気圧の張り出しが強く、向こう1か月の日照時間は多い見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	20	30	50

【概要】

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、多い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。

。<1週目の予報> 8月1日(土)～8月7日(金)

太平洋高気圧に覆われて晴れるでしょう。

※詳しくは、週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 8月8日(土)～8月14日(金)

太平洋高気圧の張り出しが強く、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 8月15日(土)～8月28日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 普通期水稻

1 水管理と追肥

根の健全化のため間断灌水を行い、出穂前後は十分水を保ちます。台風時は深水とし、通過後も吹返しの高温・乾燥風で障害が発生する恐れがあるので風が止むまで保ちます。

追肥はヒノヒカリでは幼穂の長さが1匁程になったら行います。一発型の肥料を用いたほ場では施用する必要はありません。

2 病虫害防除

穂いもち対策は出穂前と穂揃期頃に防除します。

トビイロウンカ（秋ウンカ）被害は減収が激しいので予察情報や観察をもとに防除します。カメムシ防除は穂揃期とその10日後の2回は行います。地域ぐるみで周辺草刈りを出穂の2週間以上前迄に行うと、カメムシ密度低下に有効です。但し、出穂直前に行うと逆にカメムシを水田に追い込んでしまうので注意します。

◆ 大豆

1 中耕・培土等

長雨等で播種が遅れ、株の成長も遅れています。一回目の中耕・培土は本葉三葉期に第一節の位置まで行います。二回目は本葉五葉期に第三節の位置までが基本ですが、播種遅れのところでは、草丈や開花（莢）位置が低くなるので、培土の高さは収穫時の刈刃位置も考慮します。ほ場の排水溝も整備します。

2 病虫害防除

ハスモンヨトウ防除は若齢幼虫時が効果的です。ほ場観察に努め、孵化直後の幼虫食害による白い斑葉（網目状の被害）を見つけたら直ちに防除します。

◆ そば

播種時期は山間地域は8月上中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

排水溝を設置し、10a当たり播種量は、条播が6kg、散播は約10kgで、

天候を見ながら播種します。

(鎌田 博人)

施設野菜

施設野菜の育苗開始時期ですが、8月の高温は雌花の着生や発達に大きな影響を与えます。温度管理に注意し、こまめなかん水管理が必要です。

育苗ハウスには防虫ネットを設置しますが、ハウス内の温度が高くなります。遮光資材等を利用し昼間の温度上昇を防ぐことが大切です。日中の高温時には遮光率の低いものを使い、曇雨天日や朝夕には光が当たるようにします。

◆ きゅうり

高温期の育苗では地上部の生育に対して鉢内の根量が少なくなります。このような苗を定植すると活着不良等により初期生育が遅れます。健苗育成のためにはハウス内の温度を下げ、こまめなかん水を行います。

アブラムシ類やアザミウマ類が媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要です。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぎ、定期的な薬剤防除やウイルス病の伝染源となるハウス周辺の除草を徹底します。

◆ ピーマン

セル苗など若苗で定植する場合には、初期生育が旺盛になるため、基肥の減肥や活着後のかん水を控えて、草勢を調整します。

鉢上げを行い二次育苗する場合には、生育が進むと蒸散も盛んになるので、日中乾燥しないように適宜かん水を行いますが、夕方のかん水や多かん水は避けます。徒長を防ぐため鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。

◆ トマト

ミニトマトでは下旬よりセル苗ダイレクト定植が始まります。初期生育が旺盛となり異常茎（めがね）が発生しやすくなるので、基肥を減らし活着後のかん水を控え、草勢を調整します。黄化葉巻病（TYLCV）対策としてウイルスを媒介するコナジラミ類の防除を徹底します。

◆ いちご

蒸散量の増加により、鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中に十分なかん水を行います。水のかかりにくいところは手かん水を行うなどこまめな管理が必要です。緩効性肥料等を置肥する場合は、今月中旬までに施用します。極端な肥料切れは苗質に大きく影響しますので、苗の生育状況に応じて、液肥の葉面散布等を実施します。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ 秋冬野菜の土づくり

秋冬野菜の植付けに向けて土づくりを行う時期です。作土層の拡大や排水性の向上をねらい深耕を行う『物理性の改善』、土壌分析にもとづき石灰資材等で土壌酸度の調整を行う『化学性の改善』、完熟した堆肥等の有機質資材を投入する『生物性の改善』といった3つの視点で土づくりを行う事が重要です。

◆ 加工にんじん

播種時期となります。高台地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となりますが、土壌が乾燥又は過湿の状態では、発芽率が低下します。ニンジンは一斉に発芽させることが多収につながるため、かん水施設のあるほ場では播種前に適度なかん水を行ってから耕耘・播種します。また、干ばつ等で土壌が乾燥しやすい場合は播種後もかん水を行います。

◆ 食用かんしょ

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなりますので適期に収穫しましょう。また、秋にかけて鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発する時期になりますので、若齢幼虫期に薬剤防除を行います。

◆ さといも

マルチ栽培の石川さといもは収穫が遅れると「水晶芋」や「割れ芋」等が

発生し品質が低下しますので、8月中旬までには収穫を終えましょう。

中生種では8月の土壌水分量が収量・品質に大きく影響します。代表的な生理障害として、土壌の乾燥による石灰の吸収阻害で発生する「芽つぶれ症」があります。かん水が可能なほ場では、スプリンクラーの利用や通路かん水などを行ってください。また、今月から来月にかけてはヨトウムシ類が発生しますので若齢幼虫期に防除を徹底しましょう。

◆ キャベツ・はくさい

年末～年明けに出荷する作型の播種時期となります。育苗ハウスはサイドに防虫ネットを張り、120～150穴セルトレイで育苗します。25日前後で定植期に達しますので、本圃の準備が遅れないようにしましょう。

(杉村 幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

Mサイズの果実横径は8月10日の時点で50から56^{ミリ}が理想です。肥大が遅れている樹については、さらに摘果を行いましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は、日照不足に伴う温度不足から、開花が大幅に遅れました。肥大の遅れは出荷開始の遅れによる、販売単価の低下につながります。8月下旬から、傷果を中心とした荒摘果を開始し、初期肥大を確保するため、結果確認後の施肥とかん水を十分に行いましょう。結果が遅かった園や夜温が早く低下する中山間地域では、9月から加温が必要な園地が出てきます。早めに準備を進めておきましょう。

◆ マンゴー

5～7月の日照不足に伴い剪定後の枝の発生や緑化の遅れが見られます。緑化の遅れは、花芽分化や収量に悪影響を及ぼします。葉面散布や新梢の間引きで早期緑化を図りましょう。剪定の遅れた園では、剪定直後から夜間の加温や早朝及び夕方の保温を行い、新梢の発生、緑化を促進しましょう。

2 落葉果樹

◆ ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の作柄にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆ クリ

今月から収穫が始まります。毎日収穫し、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病虫害果や腐敗果を減らすことができ、その後の品質も良好になります。

3 台風対策

風対策としての防風ネットの点検、冠水対策としての排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策などで行う薬剤散布は台風襲来前に実施しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 夏秋ギク

強い日射により成長点付近の葉焼けが懸念されますので、遮光や換気、葉面散布剤の散布、かん水等の対策を実施してください。9月出荷では高温や多肥によって貫生花や扁平花などの奇形が多く発生しますので、施設内の気温をできるだけ下げするために遮光や換気等を行いましょ。

◆ 秋ギク

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を進めてください。採穂は同化産物を十分に蓄えた晴天日の午後にできるだけ行います。冷蔵は穂・苗の貯蔵・確保と成長促進のために2～4℃で実施しますが、冷蔵期間が長期になると穂の傷みが多くなります。さらに、「神馬」系統の品種は幼若性の獲得による開花遅延も懸念されますので、冷蔵は3週間までにしてください。

◆ ホオズキ

最も暑い時期の出荷になりますので、収穫後速やかに水につけるとともに、結束時に水切りを実施し、品質保持剤を使用し、十分な水揚げを行いましょ
う。また、出荷終了後は、土壌伝染性のウイルス対策として残渣の腐熟処理
を徹底して実施しましょう。

◆ スイートピー

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。種子は
できるだけ充実した大きいサイズのもの選びます。吸水中に酸素不足を防止
するため吸水処理は流水中で行ってください。また、吸水時の水温が低いと
発芽率が低下しますので、吸水時の水温は30℃程度に保ちましょう。

◆ シキミ

気温が高くダニ類の被害が多い季節になります。定期的な防除で良品生産
に努めてください。最も需要のある時期ですが、高温期でバクテリアが繁殖
しやすいので清潔な水で水揚げを行い、出荷先で事故品が出ないよう気をつ
けましょう。

◆ デルフィニウム

平坦地では8月中旬に鉢上げを行います。育苗中は、定植時に本葉10枚
前後に達するのを目標にかん水、施肥を行ってください。中山間地では定植
が始まります。早期抽だいを抑えるためにハウス内は換気や遮光をおこない、
できるだけ気温の上昇を防ぎましょう。

◆ トルコギキョウ

平坦地では種子冷蔵終了後の夜冷育苗が始まります。12時間日長・夜温
12℃程度で育苗します。発芽後は定期的に追肥を行い、苗の充実を図りま
す。育苗中の高温や乾燥で低温の効果が失われますので、日中は十分な換気
を行うとともに、適切なかん水管理に努めてください。

◆ キイチゴ

秋に向けて切り戻しを行います。一度に実施すると枯死する場合があります

すので、樹勢維持のためのシュートを5本前後残し、数回に分けて上旬までに実施します。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

暑い日が続くこの時期をうまく越せることが重要です。暑熱対策を一つでも多く取り組み、家畜がより快適に過ごせるようにしましょう。夕方や夜間など日中に比べ気温が下がっても暑熱対策は続けましょう。

夏場は家畜の飲水量が特に増えます。母牛はもちろんのこと、子牛や育成牛がいつでも新鮮な水を十分飲めるよう水槽やウォーターカップはこまめに清掃します。なお、採食量が低下した家畜は、ビタミン・ミネラル類の補給を行いましょう。

◆ 飼料作物

サイレージの腐敗も懸念されます。ロールを開封した場合、残った部分ができるだけ空気と触れないようビニル等を被せます。バンカーサイロなどの場合はサイレージの取り出しはできるだけ素早く行い、空気と触れる時間をできるだけ短くしましょう。給与時に腐敗やカビを見つけたり、通常と違うニオイ、変色したサイレージ、温度が上がったサイレージは廃棄します。絶対に給与しないでください。

トウモロコシの収穫時期になります。適期収穫を心がけ、サイレージ調製に当たっては十分に踏圧を行い、ビニルをすきまなく掛け嫌気発酵（できるだけ空気を入れない）するようにします。

◆ 昆虫対策など

蚊やサシバエなどの吸血昆虫も発生しやすくなります。牛舎内の消石灰消毒は、子牛の下痢予防になるだけでなく、害虫の発生を抑える効果もありますので、ぜひ取り組んでください。防疫対策の徹底も引き続きお願いします。

なお、暑い時期の農作業は疲れがたまりやすくなり注意力が低くなりますので、農業機械等の取り扱いには基本に忠実に事故がないようにしましょう。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と、葉層や芽数の確保を図るために大変重要となります。

1 最終摘採と干害防止

秋芽の生育期間を確保するため最終摘採時期は、山間地域で7月中旬、その他の地域で8月上旬が目安です。また、遅れ芽や徒長枝は、秋芽を切らないように注意して整枝します。

高温・乾燥は秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30^{リットル}の散水が効果的です。

2 病害虫の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病、輪斑病等の病害虫が発生しやすくなります。秋芽萌芽期と二～三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回りますので、茶園を良く観察してください。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では8月下旬までに、これ以外は9月上旬までに、土壌診断結果を考慮し地域の施肥基準に準じて施用します。

土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬を目安に堆肥を1～2^ト施用し深耕します。長雨と日照不足で樹勢低下が見られる茶園は、液肥の散布が効果的です。

(黒木 清人)

◆ しいたけ

夏場の高温は、しいたけの発生量への影響や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぐとともに、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くしましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、害菌が発生しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、被害が見受けられた場合は被害木を取り除いて隔離しましょう。

(吉行 浩太郎)

◆ たばこ

今月は、残幹処理や夏期深耕、並びに通常期販売に向けての出荷規格確認などが主な作業になります。

- 1 病害の耕種的防除のため、総かぎの終了したほ地から残幹処理を行い、すみやかにほ地外へ持ち出しましょう。
- 2 夏期深耕は、土壌中の病原菌密度低下や、土作りのために重要な作業となります。スキ等による反転深耕を行い、10日置きにロータリー耕を行う様に努めましょう。特に、今年病害が出たほ地については、念入りに行いましょう。
- 3 貯蔵害虫発生防止のため、セリコは通常期買入終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。また、貯蔵中の吸湿防止の為、全包ポリ袋梱包を行いましょ。
- 4 通常期販売に向けて出荷包の確認を行いましょ。特に、異物・過水分・色損葉等の混合など、出荷規格を遵守しましょ。

内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1ヶ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉)	やや多	<p>中山間地域を中心に葉いもちの発生を確認しています。</p> <p>箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。</p> <p>トビイロウンカは、7月上旬に断続的な飛来が確認されました。わずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。</p> <p>セジロウンカは6月上旬から飛来が確認されています。</p> <p>ウンカ類の第2世代の防除適期は8月中旬になると予想されます。</p>
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ)	並	
	セジロウンカ (夏ウンカ) コブノメイガ	並	
野菜類等	アブラムシ類	並	<p>アブラムシ類は、わずかな発生量でもウイルス病を媒介して、キュウリやピーマン等に大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後は葉裏に集合して加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。</p>
	ハスモンヨトウ等の チョウ目害虫	並	
カンキツ類	かいよう病	並	<p>これからが本格的な台風の襲来時期です。台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。</p> <p>黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、防除後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。</p> <p>ミカンハダニは、今後の高温乾燥で生息密度が高まることが考えられます。高密度になると防除効果が低下しますので、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。</p>
	黒点病	※ やや多	
	ミカンハダニ	やや少	
茶	チャノキイロアザミウマ	並	<p>炭疽病は秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。</p> <p>輪斑病の発生は気温の高い二~三番茶の摘採後に多い傾向があります。二番茶摘採後に発病葉が見られたら三番茶残葉で多発する可能性が高いので必ず防除を行います。</p> <p>ハマキ類の防除適期は発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期ですので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。</p> <p>カンザワハダニは低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。</p> <p>チャノキイロアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果が劣るので、残効性の長い薬剤か1週間間隔での連続散布を行います。</p> <p>チャトゲコナジラミは県内の一部地域で発生しています。県西部における防除適期は7月中下旬頃と予想されます。成虫は新芽に、幼虫は下位葉葉裏に寄生するためよく観察します。</p>
	炭疽病	並	
	もち病	並	
	輪斑病	※ やや多	
	チャノコクモシハマキ	並	
	チャハマキ	並	
	チャノホリガ	やや多	
	カンザワハダニ	並	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	チャノミドリヒメコバイ	並	
クワシカバガラムシ	やや少		
チャトゲコナジラミ	—		

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。

病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。